

学園ニュース

富山大学

No.22

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和 52 年 3 月 18 日

年々去来の花を忘れず

文理学部長 手 崎 政 男

「年々去来の花を忘れず」は、わたしの恩師久松潜一先生が、その御生前、わたしのためにと、色紙に書いてくださったことばである。先生は、昨年3月2日に御他界になられて、はや一周忌を迎えるのだが、わたしは、折にふれて、このことばの持つ含蓄の深さを噛みしめてみている。そこで、このことばを、わたしは、今や蛍雪の功成って新たな人生の門出に立とうとされる諸子の、その座右に、いささかの解説を付して、贈ることとしたいと思う。

「年々去来の花を忘れず」は、世阿弥の能楽論書の一つ『風姿花伝』から出たことばである。世阿弥は、「能に十体を得べき事」と前置きして、能の役者たる者は、およそ各種の役をすべて幅広くこなし得るように修練を積むことの必要を説く。それとともに、「十体を知らんよりは、年々去来の花を忘るべからず。」と説いて、「年々去来の花」を身に体することを、十体を得ることよりもさらに必緊のこととしているのだ。そのことを、「幼なかりし時のよそほひ、初心の時分の態、手盛りの振舞、年寄りての風体、この時分時分の、おのれと身にありし風体を、みな当芸に一度に持つ事なり。」と言い、また、「ある時は児・若族の能か見え、ある時は年盛りの為手かと覚え、または、いかほども藤たけて、功入りたるやうに見えて、同じ主とも見えぬやうに能をすべし。」とも言う。人には、それぞれの年齢にふさわしい「年々に去り来たる花」がある。人はそれをそれぞれの年齢に最もふさわしく発揮するほかはないのである。しかし、それぞれの年齢を越えてもまたそれを発揮するように努めるところにこそ、真の「花」が得られるとするのである。このこ

とを、世阿弥は「幼少の時より老後までの芸を一度に持つべき理」と言う。

世阿弥の父の観阿弥は、その若盛りにおいてすでに藤たけた風体をこなし得たが、その老後の演能においても、十二、三歳あるいは十六、七歳のみずみずしさを保持することができたと言われる。世阿弥は、この父のことを、「若き時分には行く末の年々去来の風体を得、年寄りては過ぎし方の風体を身に残す為手」と評している。

若齢だからとか、あるいはまた、老齢の故にとかという弁解は、いわば、一種の甘えでしかないだろう。いやしくも、真を求め、道に参ずるという以上は、老若のことは問題の外でなければならぬ。人は、それぞれの時点において、あらゆる可能性を追求すべきであり、その心を世阿弥は「初心」に求めたのだと思う。

「是非、初心忘るべからず。時々、初心忘るべからず。老後、初心忘るべからず。」と言い、初心を生涯忘れてはならぬと説く世阿弥の戒めも、「年々去来の花を忘るべからず。」ということばと表裏の関係をなすものだということができよう。

「年々去来の花を忘れず」は、わたしの先輩・同輩・後輩の所持する久松先生の筆蹟の中では、恐らく最も多いものではないかと思う。そして、世阿弥が「忘るべからず」と言ったところを、先生は特に言い改められて、「忘れず」と受けとめられたところに、先生のお人がらが窺われるように思う。このことばを、先生は、先生御自身に課す意味を籠めておいでになったに違いない。

「年々去来」の語は、また、「年々歳々」と同義だ

とされる。その当否はともかくとして、久松先生の、あの温容に再び接することのかなわない今、先生の遺された筆蹟に見入るわたしは、「年々歳々花相比似タリ、歳々年々人同ジカラズ。」(唐の詩人劉廷芝の「白頭ヲ悲シム翁二代ル」と題する詩の一節)の思いにふけらずにはいられない。先生の訃を報じた朝日新聞紙上に載った土岐善磨氏の談話「長いつきあいだが、久松さんは大変温厚な君子人で、あの人が腹を立てたり他人の悪口をいったりしている場面に接したことはつ

いぞなかった。仕事の面では、正統的な方法で古代以降の国文学史の筋の通った研究をされたことが評価されるでしょう。大家なので平生は先輩のような気がしていたが、実際はぼくより十歳近くも若い。惜しいことです。」が、先生を適切に語っている。先生の享年は81歳であった。特に「平生は先輩のような…」という土岐氏の談に、「年々去来の花を忘れず」の先生がよく語られていると思う。

新しい出発

教育学部長 酒井康彦

みなさん、おめでとう。いよいよ大学生活ともお別れ、何といっても人生での大きな一段落だ。ますます元気に、これからの生活建設に新しい意気込みを燃やして欲しい。こんな時、私事をまじえるのもどうかと思うが、私はこれで定年退職。みなさんはこれから新しい出発、私はこれが終点。別に終りだからというわけではないが、こんな場合、いつも私はみなさんのような若い頃の自分を思い出す。出発と終点、そんな気持ちも含めて、みなさんの前途を祝福したい。

昔は良かったなぞと、よく人は口にする。しかし、私が大学へ入学する頃から、いわゆる15年戦争がはじまった。卒業時の1934年ともなれば、何かにつけ「非常時」の聲がかかり、平常の姿は次第に消えていった。国際的孤立は深まり、ヒトラーが第一線に登場してくるのも、その頃だ。それに、やがて私たちを驚かす2・26事件も既に準備されはじめていた筈だし、暗い前途への不安がつるばかりの時代だった。それから続く敗戦までの約10年間、わが国の悲劇の歴史の中では狂気じみた、その種の思い出は数限りない。

今、みなさんの学生生活からの新しい出発に際して、殊更に過去の愚痴をいう積りはない。ただ、卒業後、教育の長い道を歩いてきた私としては、当初からどんなに不確実な生き方をし、自分だけの問題にばかり気を取られ、国の内外の情勢についても、将来への展望はもとより、正確な批判もできないまま、いつか激流

の中へ捲き込まれていったとしかいいようもない。その無力さ、心の動揺を思い起すだけのことだ。みなさんの、これからの生活建設へのお出発にあたって、それぞれの固有の問題、課題、抱負といったものをもつことも大切に相違ない。しかし、それらの中でも、悲劇を含む過去から将来にかけての広い展望なり、批判への努力が見失われてはならないだろう。改めて、こんなことをいうのも、最近一方では今更のように戦争の傷痕の深さを思い知らされるのに、他方では戦争の悲惨さを知らされても、知ろうともしない若い世代がどんどん増えてくるのが、それも当然のこのように思われているからだ。暗い、余りにも暗い過去の、あの人間の残虐が、簡単に忘れ去られてよい筈がない。

戦後の教育改革の理念の明るさに、私なんかは強く動かされた。自己への批判をも含めて、過去の教育の功罪の検討が戦後教育への第一歩だった。日がたつにつれて学生時代の自分が、当時、つまり1930年代の思想動向について、どんなに一面的な理解しかもっていなかったかを、繰り返し気づかされた。今日の思想的混迷も、時の流れと社会の急激な変貌を背景にした、当時の思想問題の再生ともいえるだろう。だからこそ、みなさんとの別れに際しても、いろんな角度からの歴史的展望と一貫した批判的精神の重要性を、繰り返し強調しておきたいと思うのだ。

清冽な決意で出立を

経済学部長 新田隆信

ことは2月に入り降るともなく降りやまぬ粉雪が 累積して時ならぬ豪雪をもたらした。雪国らしい風物

詩でもあるが、雪害も免れず工学部校舎の倒壊などその著例となった。しかし雪の質が淡雪に近いので一陽中天に輝けば大方は融け去って、諸君の卒業する3月19日には残雪を路上に見る程度になっているかと思われる。昭和36年と38年の2回、この地方は咫尺(しせき)を弁ぜぬ猛吹雪に見舞われ、文字通りの豪雪に難儀した。その後10余年の経済成長と技術進歩の成果は、大幅に雪害を克服し、大雪のもとでも一昔前と比べ遙かに凌ぎよい環境条件が保たれ、その点でも諸君は仕合せであった。

経済学部を巣立つ諸君は、その就職率に見るかぎり本年も100%の好調に恵まれた。だがエネルギー、資源、食糧、貿易などの面で日本経済の前途は次第にきびしさを加えようとしており、年間の経済成長率も6%を維持しなければ安定基調が崩れるというのに、それを下回る現況である。雇用不安の気配は否めない。新年度の国家予算が成立すれば、財政の赤字は総計31兆円の巨額に達する。財政運営の健全化なくして国民経済の安定はなく、財源措置の適正化なくして真の繁栄は望み難い。福祉と租税のバランスも問題である。手放しの楽観は誤算のもとである。次代日本の命運は民族の英知と努力で切り開いて行かなければならないが、新しい職場に就く諸君は、サラリーマン意識にマンネリ化することなく、職場を通していかに社会に

貢献し奉仕すべきかを不断の指標にされるよう、念慮してやまない。

敗戦の虚脱から再出発した戦後日本は、世界最大の経済発展を遂げ、年率実質13%の高度成長路線を修正後も、人口1億1100万、労働人口5260万を擁して失業人口を最小に抑えうる安定成長を辿って来た。だが不安要因が頓に深刻化する昨今、何れは不況にたえる産業構造や生活感覚、さらには弱者救済に間然しない施策をととのえることが要請されるであろう。諸君の双肩に託される任務は重大である。

戦前の大学生は5万人でエリートと呼ばれた。いまや戦後の一世代を経て大学生は200万人をこえる。大学制度は開放され大衆化されて広い門となった。その拡充も量より質への指向を含みつつ、なお時代の急務たるを失わない。自由と平等を原理とする民主体制は、大学出の大衆によって支えられるところが大となる筈である。もはや大学出というだけではエリートを意味しない。旧高商系で日本海沿岸唯一の国立大学経済学部としての本学部と与えられる高い社会的評価は、ながい歴史的伝統と先人先輩各位の辛勞の結晶に他ならない。順調な就職状況もその余沢と考えられてよい。

卒業生諸君は苦難や試練を怖れず、それによって鍛えられ磨かれることを知り、清冽な決意に立って人生の馳せ場に出立されるよう、心からお祈りする。

卒業生におくる

薬学部長 志 甫 伝 逸

薬学部卒業の皆さんには薬学4か年の教育実習を修得され、いよいよ卒業されることになり、大変におめでたく、心からお祝いを申します。

薬学4か年の教育を終わり、小学校以来16年の学業生活にピリオドを打たれるわけですが、これで安心してはいけません。諸君には卒業と同時に薬剤師の国家試験があり、これにパスして真の実社会に入らねばならないからであります。

薬剤師は医師とともに国民の厚生福祉を与かる極めて大切な聖職であります。医薬品に精通し、薬を作り、そして販売し、人々の健康管理に十分役立たなければなりません。その意味において諸君の職責は極めて大きいわけで、先ず、その自覚を新たにしなければなりません。現下は種々の薬害の諸問題が惹起して大変な社会悪を引きおこしております。その様なためにも、

また、すべて日進月歩の時代であり、日々研究を怠ることなく、真面目に慎重に、着実に薬剤師の聖職を全うされるよう努力していただきたいのです。

社会のすべては有機的な連けいの下に動いております。自分だけの利己的なものをして、大勢の他人の意見をよく聞き、自分に素直に受け入れて考え、それから自分自身の判断を立てるような、ゆとりをもつように努力されることをのぞみます。世の中は千変万化の言葉通り、様々な変化があります。忍んで耐え、よく考え、そして正しい自分の姿を出すように努力されることを祈って止みません。

送 辞

工学部長 室 町 繁 雄

御卒業おめでとうございます。

諸君は今学士様として、学園を巣立つわけですが、これから実社会に入り無事頑張ってもらいたいと念願するのみです。御承知の通り、高度成長時代から安定成長への転換、石油ショック以来の不況、大学出身者の急増、何を見ても有利な条件が見いだせない。一方では学歴無用論が飛び出す今日この頃です。

諸君はこれから実力で勝負する覚悟が必要だと思います。すでにその覚悟と決意は持っているものと思います。

人生は一日一日努力の積み重ねであります。一日を大切にすることから先ずスタートする必要があると思

います。「青年よ大志を持て」と言われたクラークの言葉のように希望を持ち、粘り強く頑張る所から先ず始めていただきたいと思います。

アルプスを制覇するにも先ず第一歩からです。それには周到な計画と準備、それに体力が必要であるでしょう。

これからそれぞれ馴れない任地に着くこと、と思いますが、どうか御体に注意され、しっかりと踏み締めて進んでいただきたいと思います。北陸の厳しい環境の中でつちかわれた粘りとバイタリティは必ずやそれぞれの道で制覇する栄光の喜びに、ひたることを確信しつゝ、御祝詞と致します。

懐 旧 哀 歓

文理学部教授 館 熙 道

まことに月日は夢のように流れてしまって丸36年の勤めがおわろうとしている。私の人生の3分の2をこの大学と共に歩いてきたが、今にしておもえば汗顔至極の思いである。何の為すこともなく時を過ごしたのに、よい先生方の友情に支えられてきた喜びが心にしみることである。悔恨と謝念の交錯する哀歓の二、三をのべさして頂こう。

新制大学発足以前に私は富山師範学校に勤務したが、私が勤めて4代目の校長として伊東法俊先生が岡山から来任せられた。この方は終戦時に心骨を砕いて今の五福キャンパスを学校用地に受けるための苦労をされたが、奇しくも私と同じく京都の平安中学校(旧制)の同窓生であられた。先生は京都大学で三木清等と共に西田哲学を学ばれ、富山師範に御在任中から書きはじめられたヤスパースを中心とする実存哲学の研究によって学位を得られた。私はしばしばお部屋へよばれて「勉強しているか」「今何をよんでいるか」ときびしくいわれた。その時は叱られたように思ったが、今はそれが恥かしい。今も先生の声と姿が眼底を去らない。先生は三重大学で定年を迎えられて後、京都東山の泉涌寺近くの御宅で静かに亡くなられた。この先生に人間としてお導きを受けたこと、それが私の喜びの第一

である。

それよりも古いことだが、私が東京大学に学んだ頃、姉崎嘲風、宇野円空、桑木巖翼先生等綺羅星の如き先生方の講義の聴講ノートを今ひらいてみて堂々たる御講義に今更敬服の思いを深くして自らを恥かしく思う。宇野先生が、「君、先生になったそうだが、ソフィストになってはならぬよ」といわれたことばの意味の深さが心にしみる。京大から東大にうつられた和辻哲郎先生の古今東西にわたる広い学識と深い人間洞察は今も私の心に生きている。東北大学長になられた大先輩石津照璽先生からうけた人間味の深い御導きもまた私の幸せであった。恩師先輩の殆んどが故人になられた今は、私自身の粗末さだけが残っている。

母はよく「お前自身は粗末だが、よい先生、よいお友達に恵まれたのが、お前の幸せだ」といったものだ。その母が十年前に世を去った時、私はむなしさの底に沈んだが、その時も学部先生方の友情に支えられてやっと今まで辿りついたのである。

文理学部の改組拡大を心からお慶びすると同時に、今、私はさまざまの哀歓をかみしめている。そしてこの大学に深い敬意と感謝を捧げながら去ることができるのは私の幸せである。

回 顧

文理学部教授 水 沢 英 男

富山に着任して9年、ふり返ってみるとあっという間に過ぎたように思われる。前半は大学紛争の渦の中にもみくちゃにされ、私にとっては未曾有の経験を与えられた。そして今になって考えると、あれは一体何であったか。流行性感冒の如きものにすぎなかったのか。果してプラスとなるべきものがあったのか。全く了解に苦しむのであるが、数学のようにプラス、マイナスでは割り切れない歴史的現象と見るべきものかも知れない。専門家の御教示を乞いたいところである。

次に富山へ来て感じたことは、月並みなようであるがやはり立山の美観であった。特に冬のそれは息を呑むばかりの鮮烈な印象を受けた。だが、これもすべての事象と同じく長くなるとマンネリに陥ってそれ程感激しなくなるものかもしれない。しかし、年々歳々立山は同じでも年々歳々見る人は変わっていくのである。

5年程前に数学の全国シンポジウムが富山で開催されたとき、私は会場兼宿舎として開店早々の城山の呉羽ハイツを選んだのであるが、その主な理由は参会者に立山を十分に見て貰いたかったためである。時期が冬でなかったのは残念であったが、皆さん相当な感銘を得られたらしく、後で立山札贅の便りをたくさんいただいた思い出がある。又その時の広貫堂の見学に関して幼時のメルヘンの記憶をかきたてられた、などであったのは面白いと思った。

さて、多年の念願が漸くかになって、今春文理学部は発展的解消して新生人文学部と理学部が発足する。この時に私は去るのであるが、在職中の皆様の御厚誼に深くお礼申し上げますと同時に両学部の飛躍的發展を心からお祈りする次第です。

五福のキャンパス

教育学部教授 酒 井 康 彦

長い教員生活だった。この五福のキャンパスへ来てからでさえ、もう30年余り、随分多くの方にお世話になった。まず何より感謝申し上げたい。

私どもが、この構内に来た当初のことは、もう本学のほとんどの人がご存知ない。戦災後、私が疎開先から田舎の細いでこぼこ道を自転車通っていた頃、今「富山大学」と記されている門柱の場所に、焼け残りの旧聯隊の門柱があり、大学発足までは「富山師範学校」の看板が掛かっていた。そして、今はない焼け残り兵舎が校舎だった。兵舎といえば、厳しい入隊時を思う人も多いだろう。変な話だが、私の思い出はもっと古く大正期に始まる。父が軍医だったので、たしか軍旗祭で兵営が賑わう日、まだ小学生の私は何度かここへ遊びにきた。大正デモクラシーの穏やかな軍隊風景に接していたということだろう。遠い話だ。

昭和22年の末から、私は大学教育学部の在り方に関する例の米人講師たちの長期講習に参加し、それを終えた翌年の春から29年まで、主にこの構内で附属小学校の再生に協力することになる。その校舎が、今の薬学部の辺りだが、これも焼け残った雪中演習場と馬屋

をつないでの改造、とても校舎とはいえず、馬小屋教室なぞと呼ばれていた。その昔、わが家の馬が父を待つ間、この構内の馬屋に繋がれていたことは知っていたが、私にはとっくに死んだその馬にまつわる話などが思い出されて、奇妙な縁に驚かされもした。その校舎の裏を歩いていると、柱に戦時の名ごりらしい「馬肥やせ」の張り紙が斜めに残っているのが眼についた。そんな所で、当時の私たちは戦災後の幾分やけくそな気持ちと、それだけにまた新しい教育理念の明るさにも惹かれて、みんなで熱意をかき立てていたのだ。「子どもは、どんな所にも樂園を作る」と、その頃何かに書いたが、全く実感だった。

あれから実に長い時が流れた。その同じ場所で、最近では鉄筋4階建の屋上から火焰ビンが飛ぶ始末だった。全く、語れば切りのない程の変わりようだ。五福のキャンパスは、私に数限りない思い出を与えてくれている。

信 楽 受 持

教育学部教授 黒 坂 富 治

新制大学が発足し、五福のキャンパスに富山県寄付の芸能科校舎が建築されることになり、私は設計と施工促進に熱意を燃やした。監督の奥沢さんが亡くなられたが、木津さんはお元気で時折りの話が当時^{まがひ}に溯る。その後いまの音楽教棟が新築される際にも、設計した私は、コンクリートが打ち込まれた屋上へ屢々登って工事完成に胸をふくらませたことだった。

このような苦労もあったが、学問研究と発表、そして教育の自由が保証された大学、そのスケールは質量ともに旧制女師時代の比ではなかった。しかし、その自由の裏面で、いろいろな不祥事が惹起した。教育学部の投書事件がその一つ。この事件で閥族の対立が、いかに関係者の心身を損耗させ、研究と教育がマイナスになったかを痛感させられた。またこれにまつわる人事がいかに難題なものか、人間の醜悪な面が露骨に見せられて寒々の思いだった。大学紛争もその一つであ

る。私は鏡のように美しかった音楽教棟の廊下や階段が、暴力学生の泥靴で踏みにじられた跡を見て、抑え難い憤りを覚えたが、それは終生拭い去ることが出来ないであろう。大学紛争を機会に、大学自らが自己革新を図らねばならなかったのに、問題はすこしも改革されないで現在に至っているのではないか。私は研究や発表の自由は外圧によって阻害されるのではなく、内部的に妨げられることもあると思う。その意味で大学は保守的である。それは大学教官の封建性、閉鎖性につながっていると思う。大学とても人間社会であるから、義理も政治も必要であろうが、お互いが大学の本質を深く内省する謙虚な真理探求者になるべきではないか。私はこの期に至り、やはり日頃自分自身に言い聞かせている、先哲の「邪見驕慢悪衆生、信楽受持甚以難」のころを憶^{おも}わずにはおられない。(昭和52年2月10日・春寒好日)

退官の思い出

教育学部教授 丸 山 豊 一

私は昭和十八年の戦争中に、富山師範学校に着任したが、学生は勉学どころではなく、神通川原の開墾や芋堀り、工場への出勤、さては山林を買収しての炭焼きまでやった。

その頃、私の一番悲しく思ったことは、「芸術の永遠感」に憧れてせっかく絵を志した若者が、私が戦争と芸術を簡単に割り切らないようにと熟慮を促したにもかゝらず、むしろ決然と海軍予備学生等に志願していったことである。そうした彼等の中には終戦で帰ってきた後は、以前と全く異った絵を描きはじめ、絶望的に酒にのめり込んでいき、それが原因で30才ばかりの短い命を絶った者もいた。その学生の抽象絵画は今も学生会館の食堂にかゝっている。

戦後は、戦争を放棄して、平和憲法のもと新制大学が発足し、明るく楽しい学園生活が始まった。しかしそれも束の間、いつの間にか時代の雲ゆきがあやしくなってきた、「文明の進歩と調和」とやらの万博と時を同じくして突然大学紛争が勃発し、再び悲しい現実と直面した。芸術史の上では世界大戦後「ダダイズム」

が発生しそこから現代の芸術思潮がうまれた必然性は知っていても、現実に自分の足もとで勃発すると、全くとまどって悩まざるを得なかった。

「芸術の永遠に憧れていた者が出陣しその後短命に終わらざるを得なかった学徒の人生」、もう一つは、「戦後思想のダダイズムを現実に提起した学園紛争」、この二つは私の長かった大学生活での最も重要な体験であった。

この根源的な二つのことからは、今後と言えども大学における学問の地下茎としてあらねばならぬと思う。

その意味でも、一般教養を基盤とした新制大学発足の理念を後退させることのないように、初心に立ちかえりながら前進してほしいと思う。

悲しく苦しかった思い出だけになったが、楽しかったことと言えば、いつも5月の連休には学生と共に新緑のけふる妙高高原や野尻湖や奥能登のスケッチに歩き廻ったこと、冬になれば信州の高原で、昼はスキーを、夜は民宿で学生と共に飲んで歌ったことなどいつまでも楽しい思い出として残ることであろう。

五福キャンパスの回顧

教育学部教授 林 三 雄

昭和23年12月の寒い雨の朝、私は富山師範学校男子部に勤めることになって、初めて五福キャンパスへ入った。戦中戦後を着古したオーバーコート、エナメルも塗らないゴム長靴、骨を幾箇所も修繕した洋がさという、さえない転任初日の姿だった。

冷雨にけむった旧連隊の敷地に、2階建や平屋建の旧兵舎が、黒々と散在していた。その旧兵舎が、教棟や雨天体育場や学生寮になっていた。そこには種々様々な服装の教師や学生がいて、その服装が、帰還軍人や外地引揚者や戦災者などの経歴と、その当時の暮しぶりを物語っているようだった。そんな服装に比べると、敗戦の3年前に朝鮮を引揚げた私の服装は、ずっと良い方であった。

翌24年の大学発足と共に、師範学校は富山大学師範学校と改称され、女子部と青年師範学校が相次いで五福に集中した。その後、経済、文理、薬学の各学部もまた移って来て、建築も旧兵舎から新木造建へ、更に鉄筋建へと変化した。そして今では、旧兵舎の面影は、大学本部裏の職員ホールの建物の形だけにしのばれるようになった。だが、その職員ホールも、かつての将校集会所が改装されたもので、改装前に既に師範学校

本部や講義室となり、更に附属幼稚園となっていたことを知る者は少なくなった。

キャンパス内の物的変化に劣らず、心的変化も極めて大きかった。戦後の世相の混乱と価値観の激変の中で戸迷ったころの学生。幼いとき戦争で父を失い飢えに悩んだ経験のある安保闘争参加学生。過保護や競争主義の教育過熱の中で育てて大学紛争でゲバ棒を振った学生。石油ショック以来の低成長経済下で現実主義化した学生。こんな学生の姿を比較しただけでも、28年間の心的変化の大きさがわかる。

教える側の変化は、学生のように集団的の表面化しなかったが、ひどい変化を示した人もいた。なかには、毅然とした態度で大学人として本来追求すべき不変なるものを求めず、いたずらに時代の変化に流されたり戸迷ったりする人が少なくなかった。そういう私も、不変なる方向の自覚において、学生に範を示せたかを怪しむのである。

しかし、五福キャンパスも28年を経て、物的にもかなり充実し、人的にも本格的な若い学者が多くなった。ここで、私のような、老大学人は、キャンパスを去るのがよいのだ、とすなおに思うのである。

退官のことは

薬学部教授 志 甫 伝 逸

私は昭和25年4月1日富山化学工業株式会社研究室から富山大学薬学部へ参りまして以来、この4月1日で27年の間、富山大学で恙なく過ごさせていたゞけましたことは、一重に皆様の御温情と御指導の賜物と心から感謝御礼を申し上げる次第であります。

企業人でありました私が、とても薬学の教育に従事することは夢にも考えられなかったことですが……。当時薬学専門学校長の横田嘉右衛門先生（のちの富山大学長）のおすゝめをいたゞき、お陰様で教育に従事させていたゞくことが出来ました。今、振り返ってみますと、世の中を動かす人材を養成してきたことを思うと、本当に良い人生を過ごし得たのだと、心から御礼を申さねばなりません。

私が薬学部に入りました当時は不完全な7講座だっ

たものが、今では14講座にふくれて大世帯になり、隔世の感ありと、おどろいている次第であります。

富山の古い薬業に培われた学校を少しでも発展させたい気持が止まず、地元の薬業関係の方々、富山県、富山大学、挙げて結集した力で文部省を動かして富山売薬につながる和漢薬研究施設の出来たことは本当に喜ばしいことでありました。そして毎年のように部門増になり、整備充実されて参りました。昭和49年6月には和漢薬研究所に昇格いたしました。さらにはまた、医科大学の設立に当たって、薬学部、和漢薬研究所の協力による医科薬科大学へ大発展したことを思うと感無量のものがあります。また現在の立派な充実した大学をみて、駅弁大学と言われた当時を顧みると、忘れることの出来ない数々の憶い出を一生心に温めておき

たいと思っております。

せん。

今後富山大学が益々発展することを祈念してやみま

教養部教授 横山文雄

富山市内で生まれ十年間を過ごして小学校5年生のとき、父親の勤めの都合から富山を離れました。それから30年余り、郷里に帰る積りもなく余所で暮していたのに、思いがけぬ機会があって昭和26年富山に戻り、そして今停年を迎えることになりました。実は数年前、妻を亡くし、それから暫くの間この地を去りたいと幾度思ったことか。しかし2年前、今の妻と、その富山弁に引かれて、2度の結婚をしてからは、そんな気持

は何処かに吹き飛んでしまいました。富山で生まれ富山で生を終えることになるようです。故郷が呼ぶということがあるように思えてなりません。家から立山の山々がよく見えるのです。四季折々の山を眺めながら静かに過ごす積りです。

皆様にはお世話になるばかりでした。御懇情忘れることはありません。有難うございました。

学生諸君には健康を祈って止みません。

A b s c h i e d v o n T o y a m a

Dr. Eberhard Scheiffle

Nicht so schon bist du zwar, Toyama, wie Kyoto, die Dame:
Viel umschwärmt, wie sie ist, und von allen verehrt,
Lächelte müde sie nur, wenn einer ihr dankte, sie priese;
Dich, Toyama, jedoch freu das gespendete Lob!
Frisches, unbefangenes Mädchen, du wirst auch den Dank nicht
Des Europäers verschmähen, bist weder launisch noch spröd.
Wie dein Gewand dir doch steht, die Reisfelder, die dich umgeben,
Wenn sie ein Glasmosaik sind, unter Wasser, im Mai,
Wenn sie zu festlichem, samtenem Grün dann verzaubert der Sommer,
Wenn selbst die nüchterne See zierlich mit Spitzen sie säumt!
Tateyama, der Heilige Berg, ist Stirn dir, wenn winters
Wie der Seligen Land schimmert sein weißes Gefild.
Sah in dein Herz ich, das unverschlossene, tätige Wesen
Deiner Bürger? Es hat, denk ich, sich mir offenbart!
Kennen lernte ich deinen Geist in der Hochschule und die
Manen Lafcadio Hearns in der Bibliothek.
Deine Gedanken, Toyama, und deine Empfindungen, Träume,
Was auch immer du denkst, Lehrende, Lernende sind's,
Professoren, Studenten, die zum Denken mich regten und Reden,
'Fröhlicher Wissenschaft', an, auch - verschwiegen sei's nicht! -
Zu des Weingottes Dienst, dessen heiligen Namen zu nennen,
Leider die Scheu mir verwehrt und des Pentameters Maß!
Freudig zwar möchte ich mich nahn der erhabenen Kaiserin Kyoto;
Denk ich des Abschieds jedoch, sticht mir die Wehmut ins Herz.
Auch an der Herrscherin Hof will ich deiner gedenken, Toyama!
Immer sei dir gedankt! Bleibe gewogen auch du!



Toyama, 18. II. 1977
Dr. Eberhard Scheiffle

筆者エーバーハルト・シ
ャイフェレ博士は昭和48年
7月より富山大学文理学部
ドイツ人教師として在任、
同学部及び教養部でドイツ
文学・語学を講じて多くの
貢献をなし、今年4月惜し
まれつつ京都大学へ転任。

風雪28年

教育学部事務長 有 岡 進

私は本大学発足以来一事務職員として約28年間大学と共に歩いて来た一人です。私の大学生活は生涯の中30代、40代、50代と3時期に区分され3つの部局でそれぞれの時期を送りました。事務局の約8年半、経済学部の9年半、教育学部の10年間それぞれに楽しいこと、苦しいこと語っても尽きないものがあります。今こゝにその一つ一つを書いてまた夢のようにすべてが過ぎ去った幻としか考えられません。

初めて事務局から学部へ出た時のとまどい。大学紛争等今更のように考えさせられます。初めて経済学部へ出た頃は、五福構内には教育学部と経済学部の建物しかありませんでした。この状態は昭和32年から数年間続きました。初めて一事務職員としての私が、学部へ出て教官の方々に、学生諸君と面接接触しとまどい考

えさせられている時の思い出として、夏休みの静かな構内で経済学部と向い合った旧兵舎の2階から誰れが弾くのか、恐らく教育学部の音楽専攻のきれいな女子学生の人弾く「乙女の祈り」のピアノの音が、じんじん鳴くせみの声をぬって毎日私の部屋へ聞こえて来たことが、昨日のように今更の如くなつかしく耳に残って消えませんが。

今はそのなつかしい別世界のようなところもビルのような建物が立ち並び自動車一杯になってしまったことは何を物語るものでしょう。

最後に一言。大学は、学生諸君と教職員の方々との良き心の触れ合いの場として発展して行くことを祈っております。さようなら。

思 い 出

薬学部事務長 桜 井 雅 楽

私が富山薬学専門学校に勤務したのは、日本が大東亜戦争に入る二カ月前の昭和16年10月であった。

勤務してから1週間後ぐらいのことであつたらうか、道で出合った学生に挙手の礼をされて、びっくりしたことがあった。年とともに食糧事情がわるくなり、薬草園で、薬草ならぬ空腹に効く薬草（食糧）増産を学生諸君と共にし、馬铃薯の収穫のとき、大きな釜で煮た馬铃薯に、息吹きかけながら食べたときの美味さは、いまでも忘れることができない。上市の眼目のお寺、立山寺に泊って山の開墾作業のとき、大きな茶碗に飯を山盛りにしてだされたときは、眼を白黒させた。また、東砺波郡井口村の暗渠排水工事の勤労奉仕作業のときに、学校から持っていった剣スコが、みんな使い光りしているのを見て、村の役員が感心していた。当時の卒業式を“皇室のことにおよばば学生のゐずまひ正音一斉に”と詠んだが、とにかくあの頃は校長先生をはじめ皆んな張り切っていた。

40年代の学園紛争のときは、教育学部で民青の、文理学部では覆面の学生諸君と怒鳴りあったこと等、い

まにして思えば懐かしい思い出となった。

卒業生が学校へ来たとき、「あんた変わらないね」とよく言われるが、40不惑の年齢以後の顔は、本人の責任とか、上司のあたたかい庇護と、同僚の方達の協力によって楽しく仕事ができ、苦勞をしなかったことによるものであろうか、よき上司、よき同僚を得たことは、本当に倖せであった。

昨年の夏勸奨をうけて、伊勢物語の“ちればこそいとど桜はめでたけれうき世になにかひさしかるべき”の歌を添えて、辞職願を提出したが、35年余の間、楽しく勤めさせてもらった富山大学ともいよいよお別れ、と思うと、やはり淋しく、“勸奨によりて辞職を云々と書く願出の文字のゆがみや”と詠んだことであつた。

4月からは毎日が日曜日、一茶の句ではないが、“大の字に寝て涼しさよ淋しさよ”と言うことであらうか。

新任にあたって

文理学部講師 道 端 齊

昨年の12月に文理学部生物学教室（環境生物学）に赴任して参りましたが、これほど美事な豪雪の洗礼を受けようとは思いませんでした。隣県の石川に生まれ、若き中学生時代に「38の豪雪」を体験しておりますが、久しく雪に接することもなかったため、当初は懐かしく思いましたが、最近はまだ好加減にしてくれと叫んでおります。

これから取り組もうとしている環境生物学と申すのは全く新しい研究分野で、しかも境界領域、複合領域にある学問であります。生物学の分野からのみ考えてみても、生態学的なアプローチは無論のこと、細

胞学的な方向からの攻めもあるでしょうし、生理学的遺伝学的さらには放射線生物学的な考え方も必要であると思っています。こうした未開発の環境生物学の分野に踏み込もうとしている今、未知のものへの不安と同時に「新しいものを我々の手で！」といったふてぶてしさが同居しているというのが本音でしょうか。

来年度から文理学部は新しく人文学部と理学部として発足することになりますが、理学部の環境生物学であることを十二分に考慮し、基礎的な面から一步一步着実に新しい環境生物学を育てていきたいと思っています。

在外研究を終えて

薬学部助教授 清 水 岑 夫

文部省在外研究員としての機会を得て、一昨年9月羽田を発ちメキシコ経由でアメリカに向った。何しろ初めての海外生活とあって、期待と不安の入り混った複雑な心境であったが、10日間のメキシコ滞後、テキサス入りした頃は幾分度胸もついてきた。今回の主目的は、テキサス大学で植物成分の化学的研究に従事し、帰路ドイツのハイデルベルク大学に立寄り、約1か月間西欧植物のスクリーニングをやろうという極めて欲張った計画であった。

さてテキサス大学と云えば米国内で何か所かあるようであるが、その本部は私が滞在した州都オースチンにあり、その名前もUniv. of Texas at Austin と呼ばれている。大学を訪れた日、キャンパス内を案内されたが、あまりの大きさに驚いてしまった。オースチン自体大学街であるせいか、学内、外の区別がつきにくく、ある時、キャンパス外と思って車をとめておいたところ、駐車違反の赤紙が貼られ、しかもそれは学内ポリスによるものである事に気が付き、2度びっくりした次第である。キャンパス内では、駐車場が各層（年間収入によりランクづけられる）毎に指定され、年間一定の駐車料金を大学の交通局に納め（私の場合特別の配慮で所属ビルに最も近い位置に許可されたので最高額の48ドル支払わされた）、ステッカーを貰って車の

前後に貼りつける仕組みになっているので、うっかり他の領域にとめると即、赤キップ、罰金という羽目になる。

最近富山大学でも駐車場の問題が起きているが、このシステムも何か参考になるような気がする。研究室は各専門分野によっていろんなビルに配属され、各ビルの前にChemistryとかPharmacyとか標識があるが、1年足らずの滞在ではとても全てを把握することは出来なかった。私の所属はBiologyの中のPhytochemistryで、そこのchief T. J. Mabry 教授の御世話になった私のために集められた数種の植物とクエートから院生として留学していたお嬢さんが待ち構えていた。早速仕事にかかったが、自分の欲しい器具類や試薬類が意外に入手しにくく手こずった。ただ感心したのはキャンパス内にガラスショップが設けられ、自分で設計図さえ持っていけば1週間位でどんな複雑な装置でも作ってくれることと、各実験台の真中をガス、空気、蒸気等のパイプが通され仕事がやり易く出来ている事である。分析機器類も日本の地方大学の一学部では考えられないぜい沢な備えようであったが、一方無駄使いをしている面もうかがえた。

それに比べ1か月滞在したドイツでは可成事情が違い、実際に動いているものしか無いといった感じで、

予算の緊縮性がうかがえる反面、無駄がないように思われた。ハイデルベルク大学で御世話になったH. Becker 教授も大変親切で、私のために植物を集めてくれたり、日程が限られているため自ら手伝ってくれたり、又研究室にあるキッチン付ゼミ室を提供してくれ、ナベ

* * *

●スキー講習会実施される

本学恒例のスキー講習会は、去る1月7日から13日まで1週間の日程で志賀高原ブナ平スキー場を中心にして実施された。

今年は雪の量も多くまた天候にも恵まれ、参加した学生約140名は教職員(指導員)20名とともに志賀高原の白銀を蹴って心ゆくまで存分にスキーの醍醐味を味わうことができた。

また、初級者から上級者まで班別に編成された各班の学生は、スキー技術の面でも格段の進歩と向上をみせた。

各班のノートより

1月7日(金)

本日、大雪の降った富山から鈍行列車に揺られて長野に到着、意外に雪の少ないのに驚いた。しかしながらバスで発着に着くと、さすがにブナ平の雪質は富山と違いサラサラの上質、歩くだけでも感じの違いがよくわかる。

本日は乗物疲れもあって、夜は10時に消灯後すぐに就寝。(7班)

1月8日(土)

今日からいよいよスキー講習会。生憎の雪で少し寒い。体操、キックターン、プルークボーゲン…etc.。

『少しやったことがある』とおっしゃっていた女子1名が6班へ昇進、よって男子6名、女子3名の計9名となる。

滑るより昇ったり待っていたりする時間が長くすごく疲れた。4時近くになると気分が集中せず疲れたの一言。明日からどうなるのだろうかと少し心配。(10班)

1月9日(日)

ゴンドラに初めて乗った。雲海が見えてとてもすばらしかった。遙か彼方に山なみが連なり実に見事な景色だった。感激!! (3班)

や食器類をわざわざ家から持ってきてくれたりした。しかし総じて外国人は親切であるが、何事においても決して他人に頼りきるわけにはいかないし、日本人の人情は外国では通用しないという事を今回の留学生活で痛感した次第である。

* * *

1月10日(月)

初心者クラスの班(9、10及び11班)で東館山へ行った。第9班は特に成績優秀(?)で、転ぶ回数は他の班に比較して大変多いけれども元氣一杯。この班にいることを大変満足に思う。

(9班)

1月11日(火)

午前中の雪はこれまでになく素晴らしかった。雪の結晶の形のままで降ってきたからだ。SNOW BRANDの雪印さんの登録商標そのままの形であった。雪は実に素適である。酒の王者白雪も、岡崎友紀も由紀さおりだって……。

(8班)

1月12日(水)

本日で講習会は最終日なのだが、一向に上達したという気がしない。1班と一緒に滑ると矢張り見劣りがする。今日は、午前中非常に寒く、新雪で転ぶ者が続出した。明後日からいよいよ大学で勉強だが、もっと粉雪で滑りたい。

(2班)



学生部だより

一 学生健康保険組合理約 の一部改正について

昨年11月6日に開催された本学学生健康保険組合の理事会において、本規約の一部が改正され、従来医療費総額の3割から、初診料及び家族療養付加金を控除して給付していましたが、昭和52年4月1日から、個人負担額（3割）の全額が支給されることになった。

これは近年医療費の高騰及び医療費請求書の証明手数料が上げられたため、個人負担の軽減をはかるものです。

一 学生証の査証について

1,2,3年次生は、各学部、教養部の学務係で、昭和52年度の査証を行いますので必ず受けてください。

なお、査証を受けていない学生証は無効となります。

一 体育系サークルリーダー研修会 有意義に終了

本年は能登路に足を運び、国立能登青年の家の屋根を打つ霰の音に厳冬の足音を感じながら、リーダーとしての厳しさをより身につけようと、参加者一丸となった研修会であった。

● 実施概要

期 日 昭和51年11月27日(土)・28日(日) 1泊2日
場 所 石川県羽咋市柴垣町 国立能登青年の家
研修生 体育会役員及び運動部リーダーの学生80名
講 師 学生部長 岩 淵 富 治
 教育学部 教 授 頭 川 徹 治
 〃 〃 田 中 久 雄
 教養部 助 教 授 稲 垣 保 彦

研究項目(主として)

1. クラブの規律と私生活について
2. 部員数の推移とクラブ運営の関係について
3. 授業とクラブの調整について

リーダー研修会に参加して

昨年の11月27日、28日の両日、国立能登青年の家に

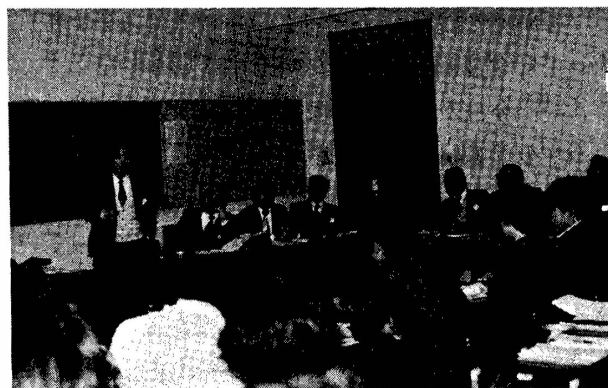
おいて、リーダー講習会が行われました。私は何も分からないまゝ参加させて貰った訳であるが、行っただけから驚いたのは言うまでもない。なにせ初めての参加で、認識が甘かったことは否めないが、それにしても、その計画性、実行力には頭が下がる思いがしました。

1泊2日という短い期間ではあったけれど、その中には極めて密度の高い内容が込められていました。専門生でなければ滅多に聞けない岩淵先生の講演は、今だにちゃんと覚えています。スポーツの重要性から戦術に至るまで説いて教えて下さいました。また分科会に分かれてからの田中先生、頭川先生、稲垣先生のお話しは、またそれぞれに有意義なものでした。3人の先生の講演を全部聞けなかったのが残念です。

また、私が最も良かったと思うのは、各分科会で学生間の話し合いが持たれたことでした。私の分科会でも、学生同志の討論に熱が入り、正午に打ち切られたのが残念でなりません。日頃、こんな機会は滅多にない為に、時は今とばかり激論が飛びかい、少なからず真実に近づけた様に思います。ただ惜しむらくは時間が短かった事であり、分科会のみに限らずすべてに言える気がします。

最後に、これを計画し、実行して下さいました学生部、体育会のみなさんの労を犒(ねぎら)うと共に、厚くお礼を申し上げます。これからもこれに終らず、青年たちの心の発育に御協力下さらんことをお願い申し上げます。

柔道部 杉本秀夫



学園ニュース編集委員会委員

学生部長		岩 淵 富 治
文理学部	教 授	堀 令 司
教育学部	〃	大 塚 恵 一
経済学部	講 師	坂 口 正 志
薬 学 部	助 教 授	宮 原 龍 郎
工 学 部	教 授	沢 畠 恭 彦
教 養 部	〃	大 谷 重 彦